意見陳述書

２０２０（令和２）年１０月９日

原告　　金　本　　暁

１、はじめに

私は宮城県に生まれ、生後３ヶ月のころから福島県いわき市で育ちました。福島第一原発事故の後に一家で福岡県久留米市に避難し、今は佐賀県鳥栖市で生活しながら福岡市内の大学に通っています。

私にとって福島は故郷であり、今も目を閉じれば、いわき市で通っていた小学校へと続く並木道を思い出します。

２、福島第一原発事故

２０１１年３月１１日、当時中学１年生だった私は、吹奏楽部の一員として当時通っていた中学校の卒業式に参列しました。卒業式での演奏を終えて自宅に帰り、食事も終えた１４時４６分に東日本大震災が起きました。牧師をしていた父の教会兼自宅が崩れてしまうかと思うほどの揺れに、自宅にいた父と兄とともに路上に飛び出しました。路上には隣近所の人たちも家から飛び出して不安そうにしていました。

やがて地震の揺れも収まり、自宅に戻ってテレビを付けてみると、各地を襲う津波の映像が目に飛び込んできました。一体何が起きているのかも分からず、食い入るようにテレビに映る津波の映像を眺めていました。

幸い電気は通っていましたが、翌朝になっても水道が復旧しませんでしたので、兄とともにバケツを持って自衛隊の給水車の列に並びました。トイレに使う水は近くの用水路まで汲みに行きました。

テレビでは福島第一原発のことも報じられていました。福島第一原発は私の自宅から約５０㎞の大熊町にありましたが、大熊町には小学生の頃、吹奏楽部の合宿で毎年のように行っていました。

福島第一原発３号機が水蒸気爆発を起こした様子がテレビで何度も流れました。原発のことなど何も分からなかった私は、何が起きているのかも分からず、ただただ兄や妹と一緒にテレビの前で固まっていました。そのときに父から「せめて苦しまないで死ねるよう祈りなさい」と言葉を掛けられました。子ども心に原子爆弾が爆発したかのような漠然とした恐怖に包まれました。

翌日以降も、兄とともにしばしば用水路に水を汲みに行きました。放射能汚染のことなどまだ私には分かりませんでした。

町からは人がいなくなりゴーストタウンのようになっていましたが、今のように携帯電話を持っていない当時の私には、友人が無事でいるのかすら分かりませんでした。

３、福島からの避難

３月１６日になり、隣に住んでいた方がガソリンを分けてくれたとのことで、父が、大阪の祖父母のところに行こうと言いました。そのときは １ 週間くらいで帰ってくるのだろうと思っていましたので、何日か分の着替えを持って１７日に一家でいわき市を後にしました。

東京、静岡で一泊して大阪の祖父宅に泊まっているときに、父が福岡の祖父母のところに行こうと言い出し、フェリーで九州に向かいました。

福岡に着き、久留米にある団地のようなところで寝泊まりしていましたが、ある日父から「これからここで暮らす」と言われ、突然のことにただただ驚きました。後で知った話ですがその団地は九州の祖父が紹介してくれた避難者向けの公営住宅だったそうです。父の突然の話に、当時高校１年生だった兄は激しく反発し一人でも福島に帰ると泣き叫んでいました。私は自分の身に何が起こっているのかも理解できず、その様子をただ呆然と眺めていました。

４月に入り、一家でいわき市に荷物を取りに行きました。何人かの友人と会い、お別れをしました。まだ中学１年生だった私たちは、福島と福岡の距離も、原発事故によって避難したことの意味も分からず、無邪気にまた会おうねと言って別れました。私の友人のほとんどは、その後もいわき市に留まったようですが、知り合いのある家族は、仕事の都合がある父だけ福島に残し、母と子どもは他県に引っ越しました。いわき市に教会を構えてきた父は、信者の皆さんとの話し合いをしていました。この歳になった今であれば、家族同然の信者を福島に残して避難する父の心境を想像することができます。

４、避難生活

久留米での生活が始まり、久留米市内の中学校に編入しました。福島では友人も多くいましたが、久留米では、これからここで生きていくんだという実感も持てず、友人を作ろうという気力も湧きませんでした。人との会話は最小限にして、学校が終わればすぐに帰宅する毎日でした。吹奏楽部もありましたが、とても入部する気にはなれませんでした。

中学３年生のときにも一度、家族でいわき市に帰省したことがありました。いわき市が原発事故によって汚染されてしまったことを自分なりに理解できる歳になっていました。しかし、まるで原発事故などなかったかのように人々が普通に生活しているいわき市の光景を目の当たりにし、認識と現実との余りのギャップに戸惑いました。私が通っていた中学校の吹奏楽部は東北大会に出場するほどまでに強くなっていました。小学生の頃から仲良くしてもらっていた先輩は、私も憧れていた吹奏楽の強豪校に進学していました。吹奏楽部のみんなと一緒に晴れ舞台に立てなかった喪失感と、吹奏楽を辞めてしまった自分への不甲斐なさから、それ以上友

人に会うことができませんでした。みんないわき市で頑張っているのに、普通に生活できているのに、なぜ自分は福岡にいるんだろう、避難を決断した両親に対しても複雑な思いを抱えながら、誰にも相談できず、誰かに感情をぶつけることすらできずにいました。私だけでなく、兄も、妹も、それぞれ複雑な思いを抱えていたはずですが、それ口にすることはありませんでした。

その後、父が鳥栖に教会を構えることになり、一家で鳥栖に移り住みました。鳥栖の高校に進学し、思い立って吹奏楽部に入部しましたが、やはり馴染めずに３ヶ月ほどで辞めてしまいました。大学受験を控え、東京の大学に進学すれば福島の友人とも再会できるかもしれないと思いましたが、避難生活によって従前の職を失った両親の苦労を知っていましたので断念し、福岡の大学に進学しました。私より先に大学に進学した兄も、福島にいたときに目指していた東京の大学への進学を諦めていました。

私たちきょうだいは平成２６年にようやく甲状腺の検査を受け、３人とも 1.2㎜の嚢胞を指摘されました。翌年の再検査では嚢胞が３㎜ほどにまで大きくなっていると言われました。その後私は検査を受けることをやめてしまいましたが、妹は３回目の検査で５㎜（判定区分Ａ２）にまで嚢胞が大きくなっていたそうです。兄や妹が、そのことについての不安を口にすることはありませんし、家族の中で話題にすることもありません。口にすると、何かが壊れ、誰かが傷付くことが互いに分かっているからかもしれません。

５、留学先のデンマークでは

私は現在大学院（修士課程）１年生ですが、一昨年デンマークに留学しました。

デンマークでは再生可能エネルギーについても学びました。デンマークでは１９７０年台から原子力発電の導入について国民的な議論が交わされました。デンマーク議会のエネルギー情報キャンペーンを通じて国民は原子力発電の推進派と反対派の両方の見解に触れ、国民の多くが導入に反対しました。これを受けて１９８５年、デンマーク議会は「原子力発電に依存しない公共エネルギー計画に関する国会決議」を可決し、その後デンマークでは風力発電を中心とした再生可能エネルギーの導入が進められました。

デンマークの学生からは、地震や津波の危険が少ないデンマークであればまだしも、日本のような地震大国で原発が進められていることは信じられないと口々に言われました。福島第一原発事故によって汚染された範囲に比して避難指示区域が原発近くのごくごく僅かにとどまっていることを話すと一様に驚かれました。

６、最後に

９年前の原発事故は、私たちの社会の在り方と人間の生き方を改善する、大きな契機でもありました。原発が私たちと共存できるものではないことを身をもって知り、他の道を模索して、方向転換をするチャンスでもありました。私も含め、多

くの被害者と、それを知った多くの人がそう考えています。しかし、政府は原発に頼る方針を未だに変えてはいません。原発事故という同じ事実から、なぜ私たちと政府との間で真逆の考えが生まれてしまったのでしょうか。現実は、ある事柄にどのような意味付けをするかによって大きく変わるものだと考えます。政府は原発事故を「予測不可能」や、「アンダーコントロール」などと説明して、あの事故を「しょうがないこと」のように扱い、すべては制御されているという意味を付けました。これは、事実誤認と古い「安全神話」に基づく、不誠実な現実です。私たちはむしろ、事実を正確に受け止め、未来の人々と社会に対して責任のある、進歩的な現実をつくりたいと考えています。

原発に頼る社会は、私も含め、多くの人の人生を変えました。私も仲間と一緒に吹奏楽部で活躍することや、憧れていた高校に入学することが根本的に不可能になりました。原発が存在する限り、今後も一定の人の人生が望まない変化を強いられます。放射能や核のゴミの危険性について、常に心配し続けなければならなくなります。これは実際に私が経験したことであり、他にも多くの被害者がいます。原発が存在する社会は、個人の意思とは無関係に、かつ無差別的に被害者を増やしていきます。社会が個人に対してそのようなことをしてよいのでしょうか。被害者の一人として、原発の無い社会、原発の無い生き方がいち早く実現されることを願います。

ここにおられる大人の皆さんに問いたいと思います。私たちだけではまだ足りませんか。原発はやめるべきです。

以上